曲目解説

Ⅰ前奏曲

ハンス・フォン・ビューローによって「ピアニストにとっての旧約聖書」と評された、平均律クラヴィーア曲集は、前奏曲とフーガという一定のスタイルの中で、驚くべき多様性を獲得しています。和声の必然的発展によって貫かれたハ長調の前奏曲にはじまった平均律クラヴィーア曲集は、この瞑想的な口短調の曲によって、第一巻を終えています。

今夜は、この口短調の前奏曲を弦合奏で演奏いたします。曲は、バスの八分音符の絶えない リズムの上に、二声部がカノン風の進行をする、トリオの形で書かれています。

Ⅱ六声のリチェルカーレ（音楽の捧げ物）

1747年春、バッハは、彼の次男カール・フィリップ・エマヌエルが楽人として仕えているフリードリッヒ大王を訪ねて、ポツダムの宮殿をおとずれました。バッハは、フルート奏者でもあり、作曲もする大王に厚遇され、オルガンの名演奏を披露しました。その折、彼は、フーガの即興演奏をするためにテーマを与えていただきたいと、王に願い出ました。ライプチッヒに帰って二カ月後、王のテーマによって、二曲のリチェルカーレとトリオ・ソナタ、十曲のカノンを作曲し、王に献上したのが この「音楽の捧げ物」です。

リチェルカーレというのは、モテットの流れをくみ、フーガへと発展した模倣様式の対位法的楽曲で、当時は、フーガと同意義に用いられていました。「音楽の捧げ物」には、三声と六声の二曲のリチェルカーレがあり、今夜はそのうちの六声の曲を、弦合奏で演奏いたします。

Ⅲ管弦楽組曲第二番ロ短調

バッハには、合計四曲の管弦楽組曲があり、この、フルートと弦楽合奏のための第二番が最も有名で、しばしば演奏されます。バッハが三十代の半ば、ケーテンの宮廷に仕えていた頃の作とされています。

管弦楽組曲はまた、序曲とも呼ばれ、当時の管弦楽曲の花形であり、フランス風序曲（緩―急―緩の三部形式）に始まり、いくつかの舞曲風の楽章がつづくものです。曲の構成は次の通りです。

序曲、ロンド、サラバンド、ブーレ、ポロネーズ、メヌエット、バディヌリー

Ⅳ オーボエとヴァイオリンのための協奏曲ニ短調

第一楽章　アレグロ　4分の4
第二楽章　アダージョ　8分の12
第三楽章　アレグロ　4分の2

バッハの協奏曲の中でも特に美しい作品ですが、これは、二台のチェンバロの為の協奏曲ハ短調の編曲です。バッハのチェンバロ協奏曲はすべて、他の楽器のための協奏曲の編作であり、これはその復元の試みのひとつです。

二台のチェンバロ協奏曲ハ短調では、二つのチェンバロが、音型的に共通点をもたず、ひとつがヴァイオリン的であり、もうひとつが木管楽器に適した音型をもっている点から、オーボエとヴァイオリンのために編曲がなされたのです。

Ⅴ ブランデンブルク協奏曲第三番ト長調

ブランデンブルク協奏曲集は合奏協奏曲集ですが、この第三番は、いささか異っています。コンチェルティーノとリピエーノの区別がなく、各々3つのヴァイオリン、ビオラ、チェロにコンティニュオを加えた編成です。また、この曲は、ふたつのアレグロ楽章だけで出来ていて、両楽章の間にアダージョと記された二つの和音があるだけです。これは、おそらく、チェンバロか第一ヴァイオリン、あるいは第一ビオラの即興のカデンツァが奏せられたと思われます。

曲は、バッハの作品に時々見られる底抜けの陽気さ、楽天的な明るさをもっています。これは、第二楽章、8分の12拍子の舞曲調の楽章に著しく、人間の様々な感情、喜びとか悲しみ、あるいは、悩み、希望など、あらゆるものをすべて吐き出してしまった後の、透明な明るさを感じさせます。